

令和 8 年度研究推進計画

三次市立三和小学校

学校教育目標

「自分らしさを育てる ～気付く・伸ばす・磨く～」

I 研究主題および主題設定の理由

(1) 研究主題

《三和中学校区研究主題》

ともに学び合いながら理解を深め、主体的に学ぶ子供の姿をめざして
～「課題発見・対話・振り返り」の工夫を通して～

(2) 主題設定の理由

昨年度は、研究主題の実現に向けて、教師一人一人が自らの授業を見直し、主体的に授業改善に取り組むことを目的として「授業改善プロジェクト」を推進してきた。本プロジェクトは、教師個々が研究テーマに基づいて自分の授業の課題を設定し、対話と実践、振り返りを繰り返しながら、年間を通して協働的に課題解決を図る校内研修の取組である。教師自身が主体的・対話的で深い学びのプロセスを体験的に理解することで、日常の授業改善につなげていくことをねらいとした。

1 学期には理想とする児童の姿や授業の在り方について教職員で交流・共有し、自分の授業の現状を振り返りながら課題を明確にした。その際、児童の問題ではなく「自分の授業のどこに改善点があるか」という視点で問題を捉え、問いの形で個別の研究課題を設定した。教科を算数に焦点化することで算数科の学力向上を図り、設定した課題については隣接学年で対話を重ね、改善の見通しや具体的な手立てを検討し、全体で共有してきた。

1 学期から 2 学期にかけては、研究授業や日常の授業実践を通して課題解決に取り組んだ。見通しを立てて実践し、その結果を振り返り、次の実践に生かすというサイクルを繰り返すことで、継続的な授業改善を図った。また、授業研究会では、良かった点や改善点を端末等で共有し、対話を通して授業の要点を概念化することで、他の実践にも応用可能な視点を獲得した。これにより、研究授業の検討にとどまらず、参加者一人一人の授業改善につながる研修を行ってきた。

3 学期には、各自が年間の実践の過程を振り返り、成果と課題を報告し合う実践報告会を実施した。ここでは成功事例だけでなく、試行錯誤や改善の過程を共有し、課題への向き合い方そのものを学び合うことを重視した。さらに、1 年間の取組を全体で振り返り、自身の変容や次年度への課題を明確にできた。

また、授業改善プロジェクト以外にも共通の取組として昨年度から本校が進めている評価シートの改善を図った。具体的には、評価シートの観点を振り返りに焦点化することで、児童が自らの学びの過程や変容を自覚し、次の学びへとつなげることができるとともに、教師にとっても授業改善の具体的な手

がかりとなり、指導と評価の一体化を図ることができた。

その結果として、研究推進に関わる児童意識調査「評価シートを使うようになって起きた自分の変化」の記述欄には次のようなものが挙げられた。

- ・ 今後頑張ることを振り返りに書くことによって、次の授業に生かすことができた。
- ・ できるようになったことがわかれば、次にがんばりたいことが書けるようになった。
- ・ 振り返りで「こう勉強したんだ」とわかるようになった。
- ・ 自主学习で振り返り、復習ができるようになった。
- ・ 以前と比べて、次に何をすべきかわかってきた。
- ・ 友達と教え合うことで勉強ができるようになった。
- ・ 振り返りが書きやすくなった。
- ・ 振り返りが書けるようになった。
- ・ 問題を説明することが楽しくなってきた。
- ・ 算数が苦手だったけどできるようになってきた。
- ・ 下学年の勉強を思い出して、今の学年の勉強をした。

このような記述から、研究教科を算数科に焦点化し、評価シートも振り返りにしぼって活用したことが、児童の自分らしさを育むことに効果的だったと考えられる。

また、3 学期の校内研修において、小学校職員に実施した「個人研究を進めたことで起きた授業や指導においての変容」の記述には次のものが挙げられた。

- ・ 児童の理解度の把握を大事にするようになった。
- ・ ほかの先生の取組にとっても興味を持つようになった。
- ・ 学習を日常生活と結び付けるために、日ごろからアンテナを張ることができている。
- ・ 操作活動や具体物の充実を行った。
- ・ 児童の姿を具体的にイメージするようになった。
- ・ 児童に身につけさせたい力を意識して授業をするようになった。
- ・ 児童の発言量を促す発問を意識するようになった。

このような記述から、「授業改善プロジェクト」は教師の授業観の変容を促し、研究に対して教師一人一人が自分事として取り組むことができたと考えられる。

しかしながら、1 月に実施した三次市学力達成度検査では、算数科において得点率が全国平均を超えていた学年は2 学年しかいなかった。また、単元末テストの思考力判断力表現力の項目においては1 学期から2 学期にかけて得点率が80%以上の児童の割合が約25%低下している。

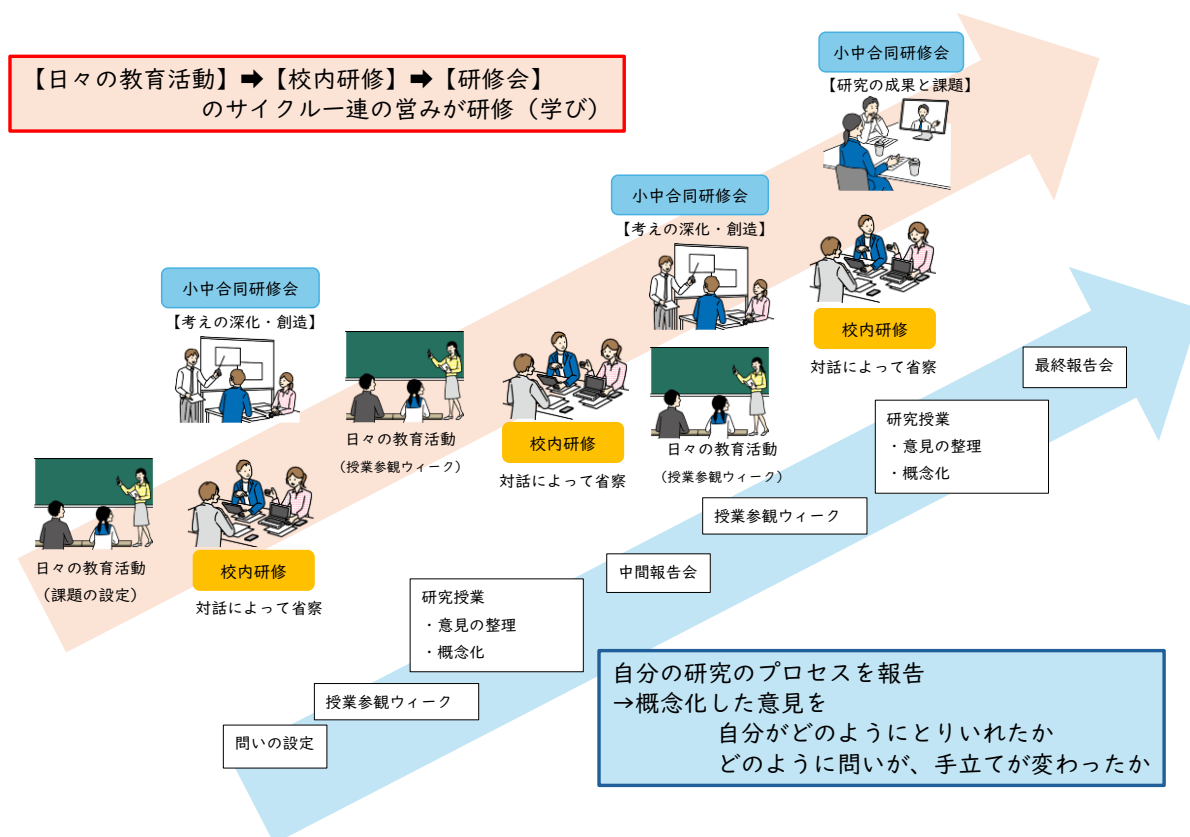
これからの要因として、二つのことが考えられる。一つ目は振り返りが学習内容や思考過程に基づくものとなっていないことや、課題の質の不十分さ、振り返りを次の学習に生かす指導の不足である。

これらは、授業改善プロジェクトとして教職員が個人研究テーマを設定する際に昨年度の研究主題である「自分らしさを育てる児童の育成をめざして」に沿ったものという範囲で設定したことで、テーマの幅が広がりすぎたことが考えられる。テーマが広がることで教員間での研究内容や方法についての吟味が十分でなくなってしまう効果的な授業改善が行われなかったと考えられる。

二つ目は、算数科の授業についての研修が不十分だったことである。昨年度から算数科に焦点化した

研究を進めてきたが、算数科の授業づくりについての理論研修が不十分であった。具体的には、数学的な見方・考え方や単元の系統性に関する共通理解が十分に図られておらず、各教員が経験や実践に基づいて授業を構想する傾向が見られた。また、振り返りの指導においても、どの視点で児童の思考を捉え、どのように価値付けていくかについての理論的な裏付けが十分でなく、学びを次の学習へとつなげる指導が不十分となる場面も見受けられた。

そこで、本中学校区の研究主題のとおり、ともに学び合いながら理解を深め、主体的に学ぶ子供の姿をめざして、算数科における「課題発見」「対話」「振り返り」について研究をする。「課題発見」では問題を解決するために必要な既習内容や見方・考え方について見通しを持つこと、「対話」では児童が自らの考えを式や図、言葉を用いて表現し、他者との対話を通して考えを概念化すること、「振り返り」では評価シートを用いて、学習内容や思考の過程を振り返りメタ認知することに取り組む。



2 児童につけたい資質・能力

三和小学校では、資質・能力を「知識を生かし深める力」「ともに考え伝え合う力」「自ら関わり学び続ける力」の3つとし、「児童の自己調整力を育む教育の在り方の探究」を通して育成していく。

【三和小中学校で身につけさせたい資質・能力】			
知識及び技能		思考力、表現力、判断力等	学びに向かう力、人間性等
知識を生かし深める力		ともに考え伝え合う力	自ら関わり学び続ける力
区分	初期	前期	中期
学年	小1・小2	小3・小4	小5・小6・中1
知識を生かし深める力	①物事や事象への驚きや疑問をもつことができる。 (問い)	①驚きや疑問をもち、理解するための知識や情報、技能等を学び取ろうとすることができる。 (問い)	①驚きや疑問をもち、理解するための知識や情報、技能等を自ら獲得しようとするすることができる。 (問い)
	②学んだことを活用して学習したり、生活に役立てたりすることができる。 (活用)	②概念的に形成された知識・技能を生活や学習の中で活用し、課題解決することができる。 (活用)	②思考・判断・表現を通じて概念的に形成された知識・技能を生活や学習の中で活用し、見通しをもって課題解決することができる。 (活用)
	③生活や遊び、体験活動から得た知識などを生かして気付きや考えをもつことができる (概念的理解)	③生活や遊び、体験活動から得た知識などを生かして知識を形成することができる。 (概念的理解)	③生活や遊び、体験活動から得た知識などを生かして知識を形成することができる。 (概念的理解)
ともに考え伝え合う力	①身の回りのことや体験したことから情報を集め、比較し、特徴をとらえることができる。 (思考・判断)	①物事をとらえる視点をもち、情報を比較・分類・関係付けたりしながら特徴や傾向をとらえ、目的に合わせて考え、判断することができる。 (思考・判断)	①物事をとらえる視点をもち、目的や意図に応じて情報を比較・分類、関係付けたりしながら根拠をもって考察することができる。 (思考・判断)
	②他者の考えと自分の考えを比較しながら話し合い等を行うことができる。 (協働)	②他者と協力して、多様な考えを出し合い、課題解決に向けた取組を行うことができる。 (協働)	②他者と協力して、多様な考えを出し合い、課題解決に向けて協働的に活動することができる。 (協働)
	③言葉を適切に用いて、自分や友達の気付きや考え、よさなどを、順序を考えながら伝え合うことができる。 (表現)	③言葉を適切に用いて、伝える相手や目的に応じて理由や事例などを挙げながら伝え合うことができる。 (表現)	③相手や目的に応じて、言葉を適切に用い、事実と意見を区別したり、根拠や立場を明確にしたりして表現し伝え合うことができる。 (表現)
自ら関わり学び続ける力	①自分から人・もの・ことと関わり合い、互いに楽しく活動しようとしている。 (コミュニケーション)	①他者と関わり合う中で、互いの気持ちや行動を理解し、関係を深めていこうとしている。 (コミュニケーション)	①他者と関わり合う中で、感情や行動をコントロールしながら、互いの関係を深めていこうとしている。 (コミュニケーション)
	②学んだことのよさや楽しさ、自己の成長を感じ、さらによりよくしようとする <u>ことができる。</u> (自己調整)	②学習計画を立てたり、 <u>学習内容や学習方法について振り返ったりしながら、自己の成長を自覚し、自らの学びを評価することができる。</u> (自己調整)	②見通しをもって学習計画を立てたり、 <u>学習内容や思考過程、学習方法などの観点をもって振り返ったりしながら、自らの学びを評価し、改善することができる。</u> (自己調整)
	③自分で決めたことをやり切ろうとしている。 (自己実現)	③将来の夢や希望、憧れをもち、目標に向けて粘り強く取り組もうとしている。 (自己実現)	③自己理解を深め、将来の夢や希望、憧れをもち、目標に向けて粘り強く取り組もうとしている。 (自己実現)

3 研究における問い

本研究における問いは次の通りである。

【本研究における問い】

- ① 本校児童における「自己調整力」とはどのような力か？
- ② 児童が問題から解決の見通しを持つ「算数科授業」の在り方は？
- ③ 算数科の学力向上に資する「評価シート」の在り方とは？

4 研究内容

研究における問いの解決に向けて、様々な教科・領域において、次の点を取り入れる。

- (1) 自己調整の三つの要素（動機付け・学習方略・メタ認知）と学びのプロセス（見通す－実行する－振り返る）をリンクさせた探究的な教育実践を行う。

三要素	動機付け(どこに向かって)	学習方略(どうやって)	メタ認知(どうだったか)
学習過程	課題発見 気付く 【自ら問いをもって探究する】	対話 伸ばす 【人と関わり、協働して探究する】	振り返る 磨く 【学んだことや学び方を自己に生かす】
児童の姿 言語化 つぶやき	問いの表出・解決への見通し・ゴールイメージの交流、共有・価値の思考 ・「あっ!」「えっ!」 ・「なぜだろう?」 ・「もしかすると○○かも」	個や集団で見方・考え方を吟味し、知識・技能を再構成・価値の探究 ・○○したら●●できた。 ・そういうことか! ・そういう考えもあるな。	見出した解（学び・学び方）について、その面白さ ・○○ってこういうことだ。 ・面白かった!次もやりたい ・便利だな。 ・もっとよくするには・・・
アクティビティ型	問いの表出、創造 ・経験や体験を通した出会いから2段階での課題設定 ・解決に向かう探究活動を自己選択・自己決定 ・評価シートの作成	多彩な交流活動 ・自然発生的な交流⇄意図的な交流の往還 ・共通体験⇄試行錯誤の往還 ・具体⇄抽象の往還 ・評価シートの吟味	価値づけ、客観視 ・評価シートの再考、修正 ・評価シートで相互評価 ・評価シートを用いた振り返り
ファシリテーション	場をつくり、つなげる 「どうしたい?」 「どうなりたい?」 「やってみる?」 「何のために?」 「どうなればいいのか?」 「どうなりそう?」	受け止め、引き出す 「なるほど。確かに。」 「本当に?」「もう他にはない?」 かみ合わせ、整理する 「それってどういうこと?つまり?」 「どこに着目したの?」 「どんな関係?」「何がすごい?」	まとめて、分かち合い、伸ばす 「どんな力がついた?」 「どんな価値があった?」 「次はどうしたい?」 「○○ということかな?」 「○○というところがすごい!」 「どう生かす?」

(2) 授業改善プロジェクトと校内研修の在り方

今年度も、全ての教員が主体的に関わる校内研修の実現を目指す。そのため、教師一人一人が課題を設定し、実践と振り返りを繰り返しながら授業改善を図る「授業改善プロジェクト」を基盤とした校内研修を推進する。

具体的には、教師一人一人が自らの授業を振り返り、「自分の授業の課題」を明確にした上で、その解決に向けた実践を行う。そして、その実践を振り返り、次の改善につなげるというサイクルを繰り返すことで、授業改善を日常化していく。この一連の取組は、見通し・実行・振り返りからなるサイ

クルに基づいて進め、教師自身の学びの質の向上を図る。

また、校内研修においては、教師同士の対話を重視する。研究授業や日常の実践について、多様な視点から意見を交流し、得られた気づきや成果を共有することで、個々の実践を全体の学びへと広げていく。さらに、個別の実践から得られた知見を整理し、他の授業にも生かすことができるように言語化することで、授業改善の質を高めていく。振り返りを校内研修の中核に位置付け、実践後の振り返りを通して、自らの授業の成果と課題を明確にし、それを次の実践へと生かすことで、継続的な授業改善を図る。

(3) 振り返りに特化した評価シートの活用

算数科においては、児童が自らの学びを調整できる力の育成を目指し、振り返りシートの活用を推進する。その際、「どのように考えたか」「何が分かり、何が課題か」「次にどのように取り組むか」といった視点に加え、既習内容との関連や学習のつながりを意識した振り返りを位置付ける。

具体的には、「これまでのどの学習とつながっているか」「どの考え方が今後の学習で生かせるか」といった視点を取り入れることで、児童が学びを単発で終わらせるのではなく、系統的に捉えられるようにする。これにより、既習事項を活用して新たな問題を解決する力を育成する。

また、教師は児童の振り返りを通して理解のつながりやつまずきを把握し、単元間の系統性を踏まえた指導の改善を図る。こうした取組により、振り返りを学習内容の定着と発展につなげ、算数科における思考の深まりと学力の向上を目指す。

(4) 算数タイムの実施

基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図るため、朝の時間や放課後の時間を活用し、「算数タイム」を設定する。

算数タイムでは、計算や既習事項の反復練習を中心としたドリル的な学習に取り組ませ、基礎・基本の確実な習得を目指す。

また、単なる反復に終わらせるのではなく、自分の考え方や間違いの原因について振り返る活動を取り入れることで、学習内容の理解を深めるとともに、自らの学びを調整する力の育成につなげる。

5 研究に係る主な研修計画 ※追加あり

月日	研修内容	備考
4月6日	小中合同研修会①（研究推進構想）	
5月11日	校内研修（熊本大学 前田康裕教授来校）	
6月	授業参観ウィーク①	
7月	研究推進に係るアンケート実施（1回目）	
8月	公開授業指導案検討 三次市学力到達度検査・全国学力状況調査の分析改善プラン作成 （2学期の取組）	
9月	授業参観ウィーク②	
10月1日	小中合同研修会②三和中研究授業（熊本大学 前田康裕教授来校）	
10月15日	校内研修（熊本大学 前田康裕教授来校）	
12月	研究推進に係るアンケート実施（2回目）	
1月	研究の成果と課題	
2月	改善プランの振り返り・改善（6月までの取組）	
3月	研究のまとめ、次年度研究構想	
☆評価シートの交流等も適宜 ☆一人1研究授業		

6 検証の指標

検証の視点	検証方法	達成目標
標準学力調査による学力定着度の客観的把握	三次市学力到達度検査（全国標準学力調査）５年生	算数科が目標値以上
	全国学力学習状況調査　６年生	算数科が全国平均以上
めざす姿に対する児童の意識調査	研究推進の検証に係る評価指標（児童意識調査） ・自己調整 ・主体的な学び、対話的な学び、深い学び	肯定的回答８割
その他参考とする資料	・評価シートの評価項目、記述内容の変容 ・児童、教職員による「成長の実感」に関する声、姿、記述など	